講演

フランス東洋學の昔と今

――在外研究の昔と今（中國學と日本學を中心に）――

福井文雅

紹介の辞

福井文雅先生のこのたびのご講演は主題が「フランス東洋學の昔と今」、副題と致しまして「在外研究の昔と今」ということでございます。福井先生につきましては、今日ここにご出席の皆様のお顔を拝見致しますと、恐らく知らない人はいないというように考えてよろしいかと存じます。私からあらためてここで先生のご業績等をご紹介申し上げなくてもよろしいかと存じます。

念のため一言だけお傳え申しますと、先生はこのたびフランスに一年間、早稲田大學の在外研究員としてお出かけでしたが、お若かったころにも三年ほど留學されていました。その後もほとんど毎年のように、國際學會などを通してフランスにお出かけでございましたし、それからフランスからこちらに學者が來れば、進んでその應對に當られました。こうして先生はいつもフランスとの交流を深めて來られました。「日佛東洋學會」というフランスと日本との東洋學に關する交流の學會がございますが、先生はその會長という重責を現在も果たしておられます。いわば中國學をご專門とされながら、より廣い視野で先生はいつもお考えであられまして、中國學をやっている日本の研究者の中では、恐らく歐米、特にフランスの學問に通じておられるという點では、第一番でいらっしゃるのではないか？　私は先生のお側にあっていつもこう感じております。このようなお方が今回一年間在外研究ということでフランスでご研究なさり、しかもあちらで講義もなさる機會もあったと承り、そういったご經驗をふまえられて、また新たにフランスの現在の東洋學の狀況についてお

話をうかがえるということは、我々としては大變樂しいことでございます。

かつて先生は、ご自身のフランスでの東洋學研究のご經驗をふまえつつ、ご著書をまとめておられます。それは『歐米の東洋學と比較論』という題名でありまして、隆文館から出ております。名著としてよく知られており、皆さんの中にもすでにお讀みの方も多いとは存じます。このたびもまた、フランスでの再度の研究體驗をふまえられて、有意義なお話がいただけるのではないかと存じます。それでは先生よろしくお願い致します。

（早稲田大學文學部教授　小林　正美）

一　はじめに

只今、大變ご丁重なご紹介をいただきまして、誠にありがとうございました。今日は特別にこういう機會を與えていただきましたので、この機會に一年閒おりましたフランスでのいささかの經驗談をお話ししたいと思っております。

さて、「フランス東洋學の昔と今」という題をつけたのでありますが、それにつきましては非常に幅の廣いものでありますから、大急ぎで資料集を作りまして、そしてお手元にお配り致しました。恐らくいろいろ不足の點がございましょうけれども、時閒の關係もあり、やむを得ずこの範圍内で申し上げます。これだけですと單なる資料提供に終わってしまいそうなので、私からの「それでどういうことが言えるのか」というコメントもしようかとは思っているのですけれども、時閒がありますかどうか。それに倉卒に結論だけ申すのもどうかとも思ってもいます。しかしながら、何とか時閒の許す限り考えてみたいとは思っております。

二　三十三年前の留學時代の思い出

只今ご紹介いただきましたように、私は年齢に致しますと二十七歳から三十歳まで、今から三十三年ぐらい前に、フランス政府の留學生としてパリで勉强したものです。その時は大學院での東アジアの宗教についての授業に出たものです。その當時は、日本からフランス政府の留學生として行く人は、中國學（廣義）ではおりませんでした。私が最初であったと記憶しております。もちろん私以前にもフランスへ勉强に行く日本人はおりましたけれども、フランス政府からスカラシップ（奬學金）をもらって中國學を勉强に行く者はおりませ

んでした。有りましても皆その所屬大學から派遣されたり、あるいは自費留學といった形でありました。受驗を經て正規の、公の「フランス政府給費留學生」として中國學のために行く例は無かったのです。そういう留學生は私のあと、少しずつ出て參りましたが、今はちょっと途絶えております。

そういう狀況の中で留學したものですから、さきほどご紹介いただきましたように、歸國してすぐ歐米の、わけてもフランスにおける中國學を中心とした、歐米の東洋學全般についての紹介文を世に出しました。當時としては珍しかったかも知れません。どうして私が珍しい存在だったのか？　これは自己宣傳になりますけれども、白水社が出した『フランス文學辭典』というのがございまして、その中の「フランスの教育制度」の項も、私が書いているのです。どうして專門家のはずのフランス文學の研究者が書かず、私がそれを書かねばならなかったのか？　それは、私がフランスの教育制度の中でも高等教育機關に屬する國立高等研究院E. P. H. E.（大學院）へよく行っていて、執筆が可能なほどフランスの教育事情を知っていたからであります。それで結局私に依頼が參りました。私はフランスの教育制度が實際どのようなものであるかということを、私なりに改めて一生懸命調べましてその項目を書き上げました。今はもう大いに制度が變わってしまいましたけれども、しかし當時としては最新の情報だったと自負しております。

さて、このたび三十三年ぶりに住まいました。その間にも何度となく毎年のようにフランスへ參りましたが、旅行するのと住まうのとでは全く印象が違います。これはもう本當に違います。まあ三十三年と申しますと、中國革命で活躍した大陸浪人・宮崎滔天に『三十三年の夢』という有名な著書があるのが連想されます。まるであの本の表題のような感じが致します。まさに三十三年ぶりの夢であります。

さて、お配りしたプリントの最初のところにも書きましたが、一九六〇年代の前半、私の留學生時代には、留學生の住居はパリ市の南端十四區、「パリ大學都市」というところにございました。實は當時、どこの國の留學生にしましても、全員そこにしか住めないという狀況であったのです。その大學都市の中でも「イタリア館」という、イタリア人留學生を中心とする留學生寄宿舍に私はおりまして、そこから學校へ通っておりました。

教育機關と致しましては、まず國立高等研究院がございました。ここは畧稱をE. P. H. E. というのです。それから

Collège de France コレージュ・ド・フランス、そしてまた、l'Université de Paris-Sorbonne パリ大學。後者は俗稱で「ソルボンヌ大學」と言っておりました。後程申しますように、今ではちょっと意味が違って參りましたが、當時はしかし「ソルボンヌ」と言えば通用したのです。私はこれらの學校で授業を受けておりました。そこでの思い出は、さきほど司會の小林先生がご紹介くださった舊著『歐米の東洋學と比較論』(隆文館、一九九一年)の中で取り上げました。

三　今回の滯佛

あれから三十數年がたちました。現在の狀況を申し上げましょう。現在とは昨年(一九九六年)ごろのそれです。私は單なる留學生の身分から今回はがらっと立場が變わり、早稻田大學の在外研究員であり、またパリ大學の大學院で講師として教えるほうの立場になってしまいました。

違うといえば、まず住まいが違います。今回はパリ市の十六區に住まいました。ここはパリ市の西の端です。そこはフランス中央放送局がすぐそばにあるマンションでした。皆さんもご存じのように、住まいというものは非常に生活に影響を及ぼすものです。しかも住まいが違えば、それに伴って人との交際も違って參ります。今回の住まいは、代々早大教授が借り受けていた極めて古風なマンションでした。ここは、今世紀初めに造られたいわば文化財の(事實、見學に來る人もいました)、非常に條件の良い住まいでして、そのおかげでとても快適な生活になりました。

これはパリに留學される人ならいずれ思い知らされることでしょうけれども、今パリは大變住宅事情が難しいのです。パリの市内に住まうのが難しい。旅行でパリに行くのは簡單なのですけれども。そこで一つ家を借りて生活するというのは大變なのが現狀です。

それで、「郊外に住んだらどうだ」という話もございました。しかし後程申し上げますように、高校一年になる娘と行ったものですから、學校の問題があります。郊外は確かに家賃が安いのですけれども、あちらの學校にもイジメの問題がございます。日本のイジメなどよりもっとひどいらしい。命にかかわる。時には當人が消えてなくなってしまうとかいう噂もありました。そういう問題が起こる可能性が、場所によってはあるのです。それで、もしも娘がフランス滯在の途中で「歸りたい」などと言い出しましたら、私も歸らなければならない怕れもありました。

ところが幸いにも、私のパリの親友二人のお蔭で、あちらへ行く前に國立の良い高校が娘には決まり、しかも私の同僚が良いマンションも見つけて取っておいてくれたので、パリに着いてすぐ、スムーズな生活ができるようになりました。良い環境の住まいと良い學校とが無かったら、私共のパリ生活はまったく違った狀況になっていたでしょう。

皆さんがもしパリへ行かれるとしたら――今日は湯淺さん（早大卒。國立歷史博物館主事。福井の教え子で、パリで研修生活中であった）がお見えだけれども――どこが住むのにふさわしいのでしょうか？　まず私が住んだ十六區。ここは昔貴族たちが住んだ地域で、住むのには最適です。それから鄰の十五區。あるいは兩者の中間の、つまりエッフェル塔の右方のサンジェルマンあたりが――ここは土田さん（早大東哲教授）も以前住まわれたところですが――まあ住むのには良い所でしょう。これらの場所からもう少し東のほうへ參りますと、そこは外國人ばかりで、フランスに住んでいる氣がまるっきり致しません。そして十三區（市の南東部）に入りますと、ここは中國人ばかりが住んでおりまして、中國に住んでいるのだかフランスにいるのだか分からないような氣になります。

そういうわけで、これからあちらへ行って暮らされる方々のために申しますと、パリという町は、場所によって印象がかなり違うのです。環境というものは非常に人間に影響を及ぼしますから、住むのにどこでも良いというわけには參りません。一番南にある「大學都市」――ここはフランス政府の留學生が最初に入居するところです。私費留學で行ってすぐに入れるという所ではありません。從いまして私費留學で行った人は非常に苦勞する、大變にお金がかかりますから。だから、もしもここにこれから私費留學したいという方がいらっしゃれば、その點覺悟して行かれたほうが良いでしょう。

最近の交通公社その他から出ているガイドブックを見ますと、若い方々は料金の安さもあって、みんな地圖の右方、二十區あたりにホテルを取ってしまうようです。それも惡くはありませんが、しかしパリに住んでいる氣はしないでしょう。

四　フランスの中國學界を語る

ともあれ、私は今回はとてもいい狀況で生活ができました。時間の關係もございますので、これから大急ぎで學界の移り變わりについて申し上げます。

實は、そもそも三十數年前には中國に關しての學會という

ものは無かったのです。私の知る限りでは、無きに等しかったのです。あったのはただ、アジア協會(Société Asiatique ソシエテ・アジアティック)という團體だけでした。これは世界で最も古いアジア研究の學會であります。

ところがあれから三十三年がたちまして、今はまず中國學會(Association française d'études chinoises)がある。ここは略稱を AFEC(アフェック)と申しまして、學術誌(Etudes chinoises, *Revue de l'Association Française d'Etudes chinoises*)を出しております。この誌題を日本語に譯せば『中國研究』となるでしょう。これは學術雜誌ですが、ここにございます春—秋合併號の目次を見ただけでも、いかに內容が充實したものであるかがうかがわれます。主だった論文を列擧致しますと、まず第一にジャック・ジェルネ先生の「ヨーロッパと中國の初期接觸について(再論)」が目に留まります。これは再論、つまり同じテーマをめぐる二度目の御論文です。第二にアラン・ルー氏の「中國國民黨の中のフランス人雇用者と中國人勞働者」が擧げられます。第三には Feng Yi 氏(漢字姓名不詳)の論文がございます。これはフランス語の題名を譯せば、「地方選良と地域の連帶——上海避難民の救助について(一九三七—一九四〇)——」となりましょう。第四にはイザベル・ロビネさんが「『莊子』管見」を寄せておられる。このロビネさんはかなり年配の女性研究者で、『莊子』研究では、日本はもちろんのこと、世界的にもよく知られた方です。これらのほか、研究ノート1篇。歐米語の著作に對する書評24點、そして研究者同士の應酬書簡2點が收錄されております。實は今日は生憎本誌の實物をこちらへ持參しなかったのですが、おおよその內容は右の通りであります。

さて次に、この學會のメンバーについて申し上げます。最初に、會長は Catherine JAMI カトリーヌ・ジャミさん。この方は女性です。私とは專攻分野が違っていますので、お目にかかったことはございません。

それから理事以下の主要なメンバーをローマ字表記を略してご紹介申し上げますと、まず理事にはバディ、ベルジェール、ビヤンコ、カルティエ、ディエニ、ジェルネ、エルヴーエット、ホルツマン、レヴィ、シペール、スワミエ、ヴァンデルメルシュの各氏が在任しておられます。ここであちらで撮ってきた寫眞をお回し致しますが、運營メンバーの近影など、これで分かるかと存じます。それぞれの寫眞の裏には、說明を書き添えておきました。まずバディさんは中國の近代文學を專攻しておられます。それからベルジェール、ビヤン

コ、カルティエの三氏は、年配格の方々です。ディエニ、エルヴーエットの二氏は中國文學の研究で優れた業績のある人々であり、特に前者が東京で勉強されたということは、皆さんも記憶していて良いでしょう。オルツマンは、フランス式の發音で、氏は元來アメリカの人ですから、原名はホルツマンと讀まれます。それからレヴィ、シペール、スワミエ、ヴァンデルメルシュの四氏は、日本でも良く知られた學者でありますが、シペール氏以外は、實はいずれもすでに定年退職され第一線を退かれた、いわば長老的な立場にある方々なのです。

理事の次には會誌編集委員會の顔觸れについてご紹介申し上げます。カルティエさん、アンヌ・チェンさん、それからダニエル・エリセエフさん。夫君のエリセエフさんは、「アメリカ日本學」の始祖として有名なあのセルジュ・エリセエフ教授の御子息です。そしてアラン・ルー、Pierre—Etienne Will ピエール＝エチエンヌ・ヴィルといった人々です。

ヴィルさんは、現在のフランス中國學界においてトップの座にある方です。ここでトップと申しましたのは、その分野の研究者の中でもコレージュ・ド・フランスに奉職する教授だからです。あちらは、實は日本とはおよそ違う、ピラミッド型の社會構造です。てっぺんにいるのと裾野のほうにいるのとでは雲泥の違いがあるのです。何しろコレージュ・ド・フランスの教授という身分は、卽、學士院の會員になれるということを意味します。この會員には大變な權威があります。下にいる人達とはあらゆる點で待遇が違って參ります。それを含めて、フランスの學界の內部事情につきましては、私は相當くわしく承知しているつもりですが、その話はまた別の機會に讓りまして、ここで、この會の年會費に目を轉じましょう。お配りしたプリントには、フランス國內在住者の年會費が二五〇フランとある。一フランはおよそ二〇圓ぐらいです。日本の同種類の學會のそれと比べてみてどうでしょうか？　ご參考までに申しますと、海外居住者の年會費は二九〇フラン。航空便で送ってもらいますと、三一五フランです。機關で入會しますと、いわゆる團體會員に成りますが、例えば早大東洋哲學會が入會するとすれば、三五〇フランになります。

さてこのフランス中國學會からは、前出の『中國研究』誌に加えて、情報通信誌の *"Lettre d' information"* というのも出している。こちらは季刊ではないかと思いますが、正確なことは今ちょっと分かり兼ねます。

とりあえず編集者の顔觸れを通覽致しましょう。まず發行者は前出の中國學會の會長であるカトリーヌ・ジャミ女史。それから編集擔當がAnna Ghiglioneアンナ・ギリョーネさん。名前からしてイタリア系の方です。それにVincent Goosaertヴァンサン・ゴサールさん。このゴサールさんは、將來きっと活躍する研究者になるでしょう。彼は中國の全眞教を專攻しています。

次に、この雜誌の內容に目を轉じましょう。國際會議、フランス國內の學會開催情報、新刊紹介、それから博士論文の審査結果といったものが載っております。大變面白い內容です。實はフランスでは、博士論文審査というのは、外部に公開されるものなのです。審査の結果が出て行きますから、これは馬鹿になりません。發行元は、前出の『中國研究』と同じです。ここに持參致しましたのは一九九七年（平成九年）三月號でして、これは第十八號となっております。

それからAssociation des bibliothécaires et des documentations en sinologie 略稱をSINODOCという團體もございます。その會誌はもっぱら圖書館關係者だけが投稿するもののようであります。團體及び會報の中國語譯名を『法國華學圖書館員及資料員協會』というようです。つまりこれは、フランス國內にある中國關係の圖書館の藏書目錄であり、しかも相互連絡に資する雜誌でもあるようです。なおまた、“SINOLOGIE ET ENTREPRISES, Expériences françaises en Chine”という雜誌も出ている。こちらのほうは、中國語譯題が『漢學與公司』といいまして、どうやら中國に關係する企業のための雜誌かと思われます。內容は一應中國雜誌としての水準を滿たしております。これらのほかにも、まだまだ中國學に關連する雜誌はあるようでございますが、今回は時間の都合上、このへんで雜誌についての紹介はやめにしておきます。

五　國立高等研究院とシペールとについて語る

次に、國立高等研究院の宗教學部門と、ここで活躍しているシペールとについて申しましょう。シペール教授は、私がかつてフランス政府留學生としてパリに滯在していた時の同級生です。

フランスにおいては、古くから中國研究が盛んでありましたが、その研究センターとなっておりましたのが、何と申しましても標題に出て來る國立高等研究院の宗教學部門です。

もちろん高等研究院には、歴史部門も言語部門もあるのですが、元來中國については宗教研究が盛んであったので、自然とこの宗教學部門が一番進んでいるようになったのです。そこでご覽のように、同部門には「ルリジオン・ド・ラ・シーヌ (RELIGIONS DE LE CHINE)」、すなわち「中國宗教」という講座が設けられているのです。その講座擔當の責任者は「教授」とは呼ばれません。教授(プロフェッスール)とは、フランスでは元來博士號を持っている人にのみ與えられる稱號であります。教授は全員博士です。しかしながら博士號を持っていない人であっても、この研究院の教員資格のある人には研究指導員(Directeur d'études)の稱號がもらえるのです。そういうわけで、前出の Kristofer SCHIPPER クリストファ・シペールが最近まで研究指導員としてここに居たのです。しかしながらシペールは、さきほども申しましたように、先般母國オランダのライデン大學に正教授として迎えられ、活躍の主たる舞臺をそちらへ移してしまいました。ただ、今なおパリの高等研究院での講義は續けております。

彼が本據をオランダに移してしまったことは、フランスの中國學界にとっては、大變な變化です。いや、大打擊でしょう。さて、研究院でのシペールは現在、「北京市の宗教史」というのを講じている。土曜日の十時から十二時です。彼は金曜日にライデンからパリへ來まして、土曜日の午前中から夕方まで授業と博士課程の學生たちへの指導とをして、それから夕方の汽車でライデンへ歸る。今ではライデンまでは、パリから三時間弱で行かれます。後程詳しく申しますが、出席する學生たちは結構おりました。

ここでもって今年一月十八日の午後に、シペールの講義を一部さいて私は發表を卽席でさせられる羽目になりました。私の發表は、「日本の道教研究の現狀を喋ってくれ」というシペールからの依頼に應えたものでした。

その日シペールの講義に出ていた大學院の學生たち全員の名前と研究論文のテーマとをプリントに列擧しましたので、ご覽いただきたいと思います。彼らがそれぞれどういうことをテーマにしているのか、これでお分かりいただけるでしょう。彼らはいずれも、大學院の中ではすごく出來が良い學生達です。

まず最初に Caroline Gyss-Vermande カロリーヌ・ジス＝ヴェルマンドさん。それから二人目に、Isabelle Ang イサベル・アンさん。三人目は Fang Ling 方玲さん。これはその名前からも知られるように中國人です。四人目は

Vincent Gooseart ヴァンサン・ゴサール。彼は全眞教の專攻ですが、なかなか出來る男です。五人目は Feng Xiao 馮蕭。彼は東嶽廟について研究している中國人です。六人目は Pierre Marsowe ピエール・マルソウ。彼もゴサールと同様、全眞教を研究しております。七人目は Feng Conde 封從德。彼は中國人でして『黃帝內經』を研究しております。中國人がパリでこういうものを研究するのは、ちょっと考えてみると妙な氣が致しますが、實は中國のあの文化大革命の前後、知識人たちが非常に彈壓された時期に、彼を含む知識人たちがパリへ逃げました。シペールはそんな彼らを研究員として迎え入れたのですね。こういうことは他の人たちにはなかなか出來ないことです。

それから、この日あいにく欠席していた院生たちは、次のような人々です。まず Alain Arrult アラン・アロウ。この人は邵雍の『皇極經世書』を研究しております。次に Fiorella Allioni フィオレッラ・アリオーニ。この人は、その名前から判りますように、イタリアの人。この人は Marianne Bujard マリアンヌ・ビュジャール、Sandrine Chenivesse サンドリンヌ・シュニヴェッスの二氏とともに「酆都」について——これは例の道教の地獄のことですが——研究しています。

さて私はプリントのほうに、「この講座の講師」と書きましたが、これはつまり、シペールの後繼者を言うのであります。それが Franciscus Verellen フランシスクス・ヴェルエレン氏でありますが、このヴェルエレンという人は、ここにいらっしゃる皆さんの中にも山田利明先生をはじめ、ご存じの方が多いでしょう。彼は「道教史研究」を擔當しております。

フランスの道教研究の講座そのものは、昔と較べると非常に少ないのです。ところが學生の數は高等研究院だけでも百人は居るでしょう。しかし、その中から教授資格者として殘れるのはたった一人、もしくは二人だけです。これはもう激烈な競爭ぶりです。

ここで研究院の他の講座に目を轉じてみましょう。まず「中華世界の信仰と思考組織（SYSTÈME DE CROYANCE ET DE PENSÉE DU MONDE SINISÉ）」の講座。擔當は Marc KALINOWSKI マルク・カリノフスキさん。彼はフランスならぬポーランドの人です。彼は日本留學中には中村璋八先生から指導を受けておりました。今や高等研究院の教授として、すっかり落ち着いております。「哲學者と占い」

というおもしろい講義題目で教えております。

次に「日本佛教(BOUDDHISME JAPONAIS)」の講座。研究指導員はJean-Noël ROBERTジャン＝ノエル・ロベールさん。彼の講義題目は「圓珍の法華經註釋」です。そして彼自身が講義要綱に《受講生は古典中國語と訓讀の知識とが不可欠である》と斷り書きしているのです。何しろ彼はフランス人でありながら、實に十四歳から漢文を讀み始めたそうで、訓讀方法にも非常に通じている。私の見たところでは、日本佛教をも含めた日本學の分野を、將來において背負って行くのは、このロベールでありましょう。もちろん、同じ分野を專攻している人は澤山おりますが、彼は右に述べました講義題目「圓珍の法華經註釋」に加えて「今昔物語とその資料——序說」という講議題目でも講義しており、これら兩者を毎週水曜日の同じ時間帶(十八～二〇時)に、交互に講義しているのであります。なおまた彼は、毎週火曜日には(十八～二〇時)、「日本佛教入門講座(漢文入門。佛典讀解)」という講義もやっております。この講義はしかし、彼自身が講義要綱で斷っていますように、《ここに出席するには、現代日本語のかなりの知識が必要である。》とのことです。

六　フランスの日本研究學界を語る

さて、ここで今度は日本學會(Société Française des Études Japonaises)についてお話し致しましょう。これは三十年前には無かった團體であります。このフランス日本研究學會はしかし、今や大變に盛んです。會員數は、私の勘定したところでは何と二百二十四名にも達します。それから協贊團體も七つあるのです。こんなにいるとは思いませんでした。私は留學終了後も何度かフランスへ行く機會はありましたけれども、この學會に出席する機會は無かったのです。だからフランス人がこれだけ日本學をしているとは知りませんでした。もちろん會員がすべてフランス人というわけではなく、フランス語の出來る日本人で、これに參加しているという人もおります。しかしそういう一部の日本人を除外してもなおこれだけ多くの本國人會員がいるとは、本當に驚きでした。

さてその會費は年間一五〇フラン。學生會員は八〇フラン。申し込み宛て先はプリントに記載致しました(SFEJ c/o Institut des Hautes Etudes Japonaises, 52, rue du Cardinal Lemoine, 75005-Paris)。皆さん方でもここへ申し込めば會員になることができるのです。會長はFrançois MACÉフラ

ンスワ・マセさん。副會長はベイユベール＝セシル・サカイさん。このサカイさんという人は、東京大學の物理學の教授だった坂井先生のお孃さんです。事務局長はナディヌ・リュカさん。その他、ピエール・スイリ、マルケ、ピジョーといった諸氏が運營に當たっておられます。ピジョーさんを含め、いずれも日本語がベラボウに上手な、錚々たる日本學者ばかりです。

さて、本日ここに持參致しました『フランス日本研究學會』誌――誌名は會名と同じなのです――の7號を通覽致しましょう。まずピジョーさんがお書きになったフランク教授への追悼文がございます。それからフランス國内で翻譯された日本の「漫畫」の一覽表が掲載されております。皆さんは「漫畫」と聞いてお笑いなさるかもしれませんが、しかしあちらでは「漫畫」こそ日本文學を研究するときの最良の資料となるというので大いに研究されております。テレビでもよく放映されております。シペールの娘も「漫畫」を描くそうです。それからこの號では、日本研究や日本の情報に關するフランス各地での會の活動狀況が報じられており、さらには一九九六年に出た日本關係の書籍目錄も掲載されております。それから會員名簿も付いており、大變に便利であります。取り立てて研究論文と見なすべき記事はなく、この7號に關してのみ申しますと、もっぱら情報誌に徹した感がございます。

ここまで會が發展したのは、ひとえに去年亡くなられたフランク教授の努力のたまものでありました。私も昨秋の教授のお葬式には列席致しました（葬儀の前後については、『日佛東洋學會通信』21號、平成九年二月刊を參照頂きたい）。思い起こせば三十數年前の私の留學時代には、フランスで日本學を專攻していた人は、フランク先生を含めてわずか三人ぐらいだったと記憶致します。今はしかし二百人餘りにまで研究者が增加しています。前出のジャン＝ノエル・ロベールが私に語ったところによれば、フランク先生は亡くなられる前に、「弟子を養成することに私は一生懸命で、結局自分の勉强は思うほどには出來なかった。」と述懷されたそうです。フランク先生がそこまで自己犧牲を惜しまれなかったので、おかげでフランスの「日本學」は大いに伸びました。先生がいらっしゃらなかったら、フランスの「日本學」は、ここまで發展はできなかったでありましょう。先生はフランス學士院會員であり、日本の學士院の客員會員でもあられました。先生御自身の述懷はともかくとして、第三者の目には、先生はとても

立派な業績を數々遺して、去られたのです。

さて、數ある會員の中に藤森文吉氏の名が見えますが、この方は早稲田大學文學部の御出身です。フランス日本學界にあっては本當に草分けの人です（一九五一年佛文卒。東大から行かれた森有正先生も草分けの人でしたが）。早大文學部の丹尾安典教授の名を記しましたが、藤森さんと丹尾さんは、昨年十二月にパリで開催されました、第二回「フランス日本研究學會」へ出席され、講演をもなさった方々です。

ここでプリントの「日本學の今昔の參考までに」と題した項目をご覧ください。ほぼ二十年前（一九七九年十月上旬）に、「日佛會議」というシンポジウム（Colloque Octobre 1979, *Les Études japonaises en France*）が開催されたのです（議事録が同名で刊行）。これには當時のフランスにおける日本研究者たちがこぞって出席したのです。その顔觸れはおおよそ次のとおりです。まずフランス側の發表者と致しましては、

B・フランク（前出）、R・シフェール、H・ロテルムンド、P・アカマツ、J・エスマン、M・ダヴィット、A・タンバ、J・ピジョー（前出）、J・　J・オリガス、W・ワッセルマン、A・ベルク、H・　C・ド・ベッティニ、J・コビ、J・ロベール（前出）、H・ブロシエ、C・ソッテール、F・エラィユ、A・ヴロダルチック、藤森文吉（前出）、C・レヴィ＝ストロス

（以上二十名フランス側代表）

前出の故フランク先生をはじめとして、いずれもフランスで日本學を盛んにした功勞者ばかりです。最後に出て來るレヴィ＝ストロス教授はしかしお客さん。オブザーバーで來たのです。

一方日本側からは、秋山光和先生、私、それから東大の渡邊守章さん、阿部良雄さん、それから芳賀徹さん、以上たった五人だけでした。實は、ハイネマン教授が欽席したので、その代りに私は前の日に急に指名されまして一晩で準備し、「日本佛教の特色と外國からの影響」の題で講演（フランス語）致しました。これら五人のほかに吉田敦彦、武者小路公秀、ガニョン、ブリュネ夫人、ルサージュ、加藤周一、松原秀一、ル・ネストゥールといった方々が討論に參加されました。しかしながら、ご覧の通り何と言っても小人數です。たったこれだけの人數だったのです。しかしあれから二十年近くを經過した今では、先に申し上げた通りの盛會ぶりです。つまり、それだけフランス政府も日本研究にお金を出すようになったと言えるでしょう。

七　「パリ大學ソルボンヌ」の大學院での講義を語る

パリ大學ソルボンヌでの、昔と今との研究狀況について申し上げます。この講演には「昔と今」と題をつけました。勿論今のことのほうをヨリ多くお話しすることになるのですが、しかしおのずと昔との比較もすることになるでしょう。

パリ大學ソルボンヌの大學院では、私はフランスに到着してすぐ講義を依頼される羽目になりました。支度はして來なかったのですが、「やれやれ！」とせつかれましたので、やむなくすることに致しました。それで私は同校の宗教史圖書室において、「*Structure du bouddhisme chinois* 中國佛教の構造（中國文明に及ぼした佛教の影響）」の題目を掲げて講義致しました。時間は月曜日の朝九時半から十一時半までで、十一月二十五日と十二月二日、九日の三回。受講生は老若男女、中國・韓國・日本人も加わって、最終的には二十二名に達しました。終って、「ソルボンヌ・クラブ」で學科主任達が晝食會を開いてくれました。

元來「ソルボンヌ」とは學部を指し、大學院は無かったのです。しかしながら數年前に大學院の成立を見、そこに極東學科も出來たのです。そして同科では、日本及び中國の宗教について履修することが定められたのであります。

さて、日本の大學で配布されている「學生手帖」もしくは「學部便覽」に相當するものが向こうの大學院にもございます。これを見ますと、（パリに着く前から）私は引き受けた覺えもないのに、前期まるまる講義をすることにされておりました。それで「前期一杯などは絶對だめだ」と斷りまして、後は「佛教概論」という講義題目でロベールさん（前出）に引き繼いでいただきました。

ここで再びロベールさんの學殖ぶりについてお話し致しましょう。佛教用語をそのままの形で言っても、向こうの人は分からない場合が多いので、フランス語が幾つか飛び出しますが、ロベールさんはまず「八相成道 Huit étapes de la Réalisation de la Voie」、それから、佛陀の生歿年について喋ったのですが、その際には Lamotte ラモット教授の說を擧げていました。すなわちそれは、BC四八六年～BC三六八年というものであります。これはアショーカ王の在位の年代であるBC二六七・二六八年から約二世紀溯らせた說であり、南傳資料に依據する歐米系の學者には多い見解であります。彼はラモットさんら歐米の學者の說とその依據資料と

にのみ言及していました。しかしながら、かりにも漢文に強いロベールのことですから、私は彼が「衆聖點記」をも當然引いてくるだろうとばかり思っていたのに――これは『善見毘婆沙律』（「大正藏」巻四十九）に出て參りますが――結局彼はそれはしませんでした。歐米の學者は、我々の閒ではよく知られている「衆聖點記」の說を、どうも意外に引用・言及しないようです。

それではロベールさんの「成道」佛譯をめぐる研究ぶりに戻りましょう。彼は學生たちに、「道」の原語（サンスクリット）には「-bodhi」もしくは「-mārga」の二つがあると說きました。「般涅槃」の原語が「Parinirvāṇa」であるとも述べておりました。そこで私が面白いと感じた彼の說明は、「成道」とは他の思想の何と比較し得るかということに關するそれであります。すなわち彼は、グノーシス說（Gnosticisme）でいわれる悟りが、佛敎でいわれる「成道」、悟りと似ていると說明したのであります。このグノーシス說というのは、初期キリスト敎の有力な異端說でありまして、直觀による宗敎的神祕の認識を主張しております。從いまして靈的直觀を殊に重んずる思想であると申せましょう。

何しろ前述致しましたように、この講義には老若男女樣々な知的水準のフランス人がやって來るのです。敎授や大學院生も來るし、佛敎にはごく疎い普通の市民も來るのです。そして彼らの聽講を拒否することは出來ません。それで彼らのすべてに佛敎の悟りについて納得してもらうには、心ある佛敎學者ならばロベール式にするほかはない。ロベールに限らず、こういう對比說明をするあちらの學者は多いのです。顧みて我々に同樣なことが出來るかといえば、これはなかなか難しいところであります。決して簡單ではありません。

實はあちらの學生たちは、概して己の感情に忠實であります。すなわち、不親切な詰まらない講義をすると見なした先生に對しては、如實にその感情を態度に出すのです。フィと橫を向いて鄰の人とワーワーしゃべり出すやら、机の上に平氣で足を載せるやら、まったく收拾がつかなくなる場合もある、という話もあります。ですから、或る友人からは「そうならないように注意しろ」と前もって言われていましたが、これはしかし言われたところで收まるものではありません。私の場合は、幸いなことに何も起こらなかったのですが、そういう憂き目を見る先生も無いわけではなさそうです。その點ロベール氏は實にしっかりしている、用意周到であると思いました。

順番を付けて申しますと、シペールやロベールがいる「高等研究院」も、もとより名高い學校であります。ここはゼミナールが中心で、フランスに留學して高度な勉強をしようと思うなら、ここが一番良い機關です。この研究院の宗教部門・歴史部門・言語部門は、名實ともに充實しているのです。

もっとも、日本ではほとんどその存在は知られていない。日本からフランスに留學する學生は、現代のフランス文學を研究する人々がほとんどであります。ところがこの高等研究院は、主としてギリシャ・ローマなどの古典をゼミ形式で勉強させており、高度のギリシャ語やラテン語が、先生方の口からバンバン出て來る。從いまして、日本からここに留學する人は少ないようです。

中國研究の講座ももちろんありますが、先生の口からは中國語ばかりか、ドイツ語も英語もバンバン飛び出す……先生方はそういう古典の言葉を口にするだけで、板書する勞を省いてしまわれる。それで聞き取れない人は、やめて行かざるを得ません。だから日本人で高等研究院で學位を取って卒業できる人など皆無に近いのではないかと私は思います。日本で出ているフランスの學校案内・學界紹介にこの高等研究院E. P. H. E. の名前が出て來ないわけですよ。しかし先生方は第一流の人々が揃っているのです。ここに留學出來るなら、それに越したことはありません。

八　コレージュ・ド・フランスについて

先程ちょっと觸れましたコレージュ・ド・フランスは、フランスの最高學府であります。教授陣は優秀ですが、單に先生方が一方的に授業をするばかりですから、學生はあまり鍛えられません。この學校では、出席も取らず、成績も付けず、しかも授業料すら取らない。居眠りしていても普通は叱られない。ただもう聽講しに行くだけの場所です。先生方の素性を申しますと、ほとんどの場合、かの學士院の會員が授業をやっているのです。

このコレージュでは、一つの專門に一人しか教授がいない。例えば誰かが「中國佛教史」の教授になったら、その人が死ぬまで、他の誰もこれに取って代われない。もっとも、同類でも例外がございました。ドミエヴィル先生が御健在の頃、R.-A. Stein スタン先生という俊才が現れました。スタン先生はチベット學を專門にしておられましたので、コレージュ・ド・フランスではスタン先生のために、特にチベット學で新たに講座を新設したのです。それで同先生は晴れて榮

えあるコレージュ・ド・フランスの教授になれたのです。しかしこういうことは普通は餘り無いそうです（なお日本文學の講座は、その草創期には前出の故・フランク先生が久しく擔當しておられました）。

さて、私は前出のヴィル教授の講義を聽いてみました。彼は「中國近代思想史」の講座を擔當しているのです。そこでのテキストは概して近代のものでありました。すなわち

『棠陰比事』・『洗冤集錄』・『疑獄集』・『孫氏祠堂書目』（清・孫星衍）・『岱南閣叢書』・『重刻故唐律疏議序』・『福專全書』

といった、近代中國の刑法に關するものを讀んでいたのです。わけても『重刻故唐律疏議序』を讀んでいたのには、特に目を引かれました。コレージュ・ド・フランスの先生方は、授業では文獻讀解をしないことが概して多いのですが、彼はそういう中にあっては珍しい存在だと申せましょう。

なおまた彼は、廣東省の歷史・習俗についても講じていました。一回の授業を二部に分けまして、まず一回目に彼は往時の廣東省の概況を語りました。そして二回目にはこれに關連した文獻（前掲）を讀解したのです。

九　フランス「アジア協会」を語る

次にSOCIÉTÉ ASIATIQUEについてお話し致しましょう。この學會の名前は、從來日本では〝フランス「アジア協會」〟と譯して參りました。世界で最も古いアジア學會であります。例會は原則として毎月第二金曜日に開催されます。只今「原則として」と申しましたのは、會員には日時變更のお知らせをも含めて、毎月必ず案內狀が來るからです。夏休み・冬休みの前には會員同士の親睦會が開かれたりします。皆さんもフランスに行かれる折りには、ここを訪れたほうがよいでしょう。所在地は3, rue Mazarine, 75006-Paris, Franceです。

ところが實は、近年中國學の分野に非常に人が乏しくなったせいか、例會に中國學の人がほとんど出て來ないのです。それで夏休み前の總會の時には、Flora Blanchon フロラ・ブランション教授が立ち上がって、

どうも最近この會に中國關係の研究者で出席する人が少ない。もっと呼びかけられてはいかがか？　それからこんな現狀を反映してか、會で出している學術誌を一覽しても、中國學の人の論文がほとんどまったく見當たらない。これ

は一體何事か。

と問題提起をされたのです。閉會後に私は彼女に、「お說はごもっともだけれども、まず會合に出る中國學者の少なさから何とかしなくては、話にならないでしょう」と申しました。思うに私が留學していた頃のフランス東洋學における大立者、例えばJean Filliozatフィリオザとか Coedès セデスとか、會を引張って行く、そういった錚々たる顏觸れが、今はもう少なくなってしまったのですね。

さて名譽總裁・名譽會長以下、運營部門にあたっている人々の具體的な姓名につきましては、これをプリントに讓りましょう。理事たちの中には、皆さんも記憶しておくべき方々が多い。まず一人目にはL. Bazinバザン教授がおります。氏は、トルコ學を專攻しておられます。中々實力のある人だと私は見ております。それから二人目には同じく理事のC. Caillatカイヤ夫人がおります。こちらはサンスクリットの大家として知られております。皆さんもご存じでしょう。それから三人目にはJ. P. Drègeドレージュさん。この方は敦煌文書の研究でよく知られております。四人目にはB. Frankフランク先生。理事選出（昨年六月）の後で亡くなられました。五人目にはJ. Gernetジェルネさん。この人は中國史の專門家です。六人目にはY. Hervouetエルヴーエットさん（例外的に語末のtは發音します）。この方はもう引退されました。七人目にはP. B. Lafontラフォンさん。彼はまだ元氣でおります。そして八人目にD. Lombardロンバールさん。彼は私とほぼ同年であり、コレージュ・ド・フランスのジャン・フィリオザ教授（インド學）の授業で私は同席し、共に學んだ男です。今は極東學院の院長になっております（今冬一九九八年一月八日急逝）。九人目にはM. Soymiéスワミエさん。もう引退して理事を退かれました。奧樣が立派な方です。十人目にはF. Verellenヴェルエレンさん。前述致しましたように、彼はシペールの後繼者です。

十　滯佛中に書いた論文の裏話

ここでいささか餘談になりますが、フランスにいる閒に私が執筆した論文類について觸れておきましょう。何しろ一人（もしくは一機關）に賴まれて書いたのに他者のためには書かないということになりますと、いかにも問題です。それやこれやで結局三篇書くことになりました。ただしこれには妙な橫槍が入り、大變苦勞致しました。中々簡單には行かなかった。またしても裏話めいて參りますが、敢えてお話し致しま

しょう。まずプリントで最初に出しておきました『スワミエ教授頌壽論集　敦煌から日本へ（中國研究と佛教研究）』への寄稿論文 *L'adoption au Japon du titre d'empereur* tennō（譯題：日本における天皇號の採擇について。日本語では未發表）。フランス語の表現が、筆者の私に何の斷りなく直されていました。

そして又二番目の、フランク先生の『追悼記念論文集』への寄稿論文「*À la recherche du sūtra perdu　Quel était le Sūtra du Coeur récité par* Xuanzang (602?-664) *en route pour l'Inde*?（譯題：失われた經を求めて）」は原稿のままで、つまり初校で手を加えたにもかかわらず、私の校正は一切おかまいなしで、しかも私に一切斷りなしで、出版されてしまいました。論文の內容は、玄奘三藏がインド出立前に讀誦したとされる『般若心經』をめぐるものであります。ご存じのように、『般若心經』が譯出されたのは、彼がインドから歸國してからのことです。それならいったい出立前に讀誦したとされる『般若心經』とは、どういうものだったのか？　この研究課題は、私はさきに博士論文でも取り上げたものであります。しかし博士論文では少ししか書けなかったので、今度は新出資料も加えて詳細に書きました。右に申しました題名は、プルーストの名高い小說『失われた時を求めて』（原題：*À la recherche du temps perdu*）をひねったものです。私としては會心のタイトルと思っていました。私の親友で、フランス人の閒でもきっての名文家で知られる Diény ディェニ君なども、「非常にいいタイトルだね」とほめてくれたものです。

ところがそれなのに、せっかく苦勞して考えた題名が、私に無斷で無視されてしまいました。「失われた經を求めて」に相當する語句が入ってなくて、單に副題だけで出版されてしまったのです。論文集は、ロテルムンドとピジョー兩教授の共編です。編者によって題名が改變されたままで出版されてしまったことを、私はフランスを去る直前になって知りました。それで編者二人—と言うより主編のR氏—宛で手紙を書き、抗議致しました。編者が再校を載せないで、初校のままで出してしまうなどは、日本ではおよそ信じられない行爲でありますが、向こうでは珍しくないそうです。何とこれこそ〝編集者の權利〟なのだそうです。このままでは折角初校を見てくれた親友二人の好意を無にし、いわば裏切ることになりますので、私は默っておられず、初校と再校との對照表を作って本屋と關係讀者とに送付致しました（これに對して、

主編R氏から、「自分等に非はない」という返答が遅くなって來ました。このいわば强辯の返事にも反論を出しました。外國人との抗爭では「謙讓」は美德ではなく、決して退かぬことです)。

さて、三番目の論文も、二番目のそれと同樣難產でした。「*À propos du véritable sens de la notion de* ren *à travers les sources bouddhiques*(譯題:佛教資料を通して見た「仁」の本義)」という題名ですが、私はこれをヴァンデルメルシュ教授の『頌壽記念論集』(總題未定)へ寄せたのです。この論文集の編集長は、G教授なのですが、彼はどうやら私とは所說を異にしているようでした。その爲か、「ワープロが日本製のワープロなので採用は駄目だ。フランスのワープロを使ってくれ。」などと、寄稿を賴んだ本人がいわば難癖をつけて來た。私はこれを日本製のワープロで書いていたのです。他の日本人寄稿者にもそういう注文をつけたのであればともかく、私だけに對してであれば難癖としか思えませんでしたが、やむなくフランス製のワープロで書き直しました。そうしたら今度は、「あなたのフランス語は素晴らしい。しかし幾分口語が混淆している。そこを書き改めてほしい。」などと言ってきたのです。しかし、どこが口語(俗語とは違います)なのかとなると、言ってきません。こうなるともう(夜郎自大の?)嫌がらせ? としか言いようがないではありませんか。ここまで言われたので、知人の中にも「寄稿はやめたら」と忠告してくれる人もおりました。しかしやめるわけには行きませんので、とにかく口語らしき表現は改め、再度送りました。その後、何も言ってこなかったところから見ますと、何はともあれ、私の論文は載るでしょう。

しかしフランク先生追悼記念論集での例もあり、出版されてみないと、結果は判りませんね。ここで息卷いても始まりません。ただ一つ言えることは、日本の研究者はこういう目に遭うと、大抵仕方がないと諦めてしまうが、簡單に諦めてはいけないということです(この講演後、この記念論集出版の噂が入ったが、實物は今年の二月になっても未着)。

十一　滯佛中入手の新刊書

いよいよ講演も終わりに近づきました。最後に、私が滯佛中に入手した新刊書についてざっと御紹介申し上げます。リストに列擧した書目のうち、初めの方の四つ――『歷史家と信仰』・『宗教閒の對話』・『神と對話の變革』・『宗教閒の交流の時代』――は、私が個人的に關心をもって購入致しました。これらはしかし、皆さんには差し當たって關係があると

は思われません。

さて、五番目の Emile Poulat エミール・プーラが著した『キリスト教は何處へいくのか？　紀元三千年の曙に當たって』になりますと、これは中々興味深い。それから六番目の Alain Peyrefitte アラン・ペイルフィットが著した『中國は目覺めた（*La Chine s'est éveillée*）』。この本は向こうで大變ヒットしたものです。これは三部作の三番目でして、その第一作は『中國は目覺めるだろう』、第二作は『中國は搖れ動く』です。

七番目の『中國の狀態（*L' État de la Chine*）』。これは中國學概論でありまして、フランスの中國學者三十七名及び歷史學者十二名を含む、百數十名から成る執筆者によって編纂されたのです。それから八番目の『日本の狀態（*L' État du Japon*）』。これは『中國の狀態』と似たような陣容（執筆者は右と同じく百數十名）で編纂された本です。こちらはその書名の通り、日本學概論であります。

さて、九番目の『臺灣の音樂（*Musique de Taïwan*）』。日本は臺灣をどうも輕視しておりますが、フランスは臺灣とは大變に深いつながりがあるのです。研究も當然盛んです。そして十番目は『與えることと受け取ること（*Donner et Recevoir*）』という、何やら變わった題名を持つ本です。實はこの本を收錄する『アジア叢書』の總編集長フロラ・ブランション教授（前出）は、私の歐文の論文を讀んだことがあり、ソルボンヌの大學院で授業をするよう取り計らってくれた方です。ブランション教授は、グラネの弟子の Madame Nicole Vandier-Nicholas ヴァンディエ＝ニコラス夫人の弟子です。「フランスでは英語の使用を嫌う」とは日本の通念でありますが、そんなことはない。この本が良い證據です。學術書の大事な箇所には、このように必ず英語による要約が付くのです。そういう事實を皆さんにも認識していただきたく、實物をご覽に入れるのであります。

十一番目の『中國の文化史研究（*Hommage à Kwong Hing Foon, Etudes d'Histoire culturelle de la Chine*）』。これは、夭折された女性研究者 Kwong Hing Foon（鄺慶歡）さんに捧げられたものであります。この鄺さんという方は、早稻田へも見えられました。〝鄺〟という姓からも知られますように、彼女は廣東の人であります。非常に優秀な方でしたけれども、惜しくも夭折されまして、本書は遺著です。この編者であり、友人でもある Jean-Pierre Diény ディエニさんを大變嘆かせました。

最後に、十二番目の『眞言と［外護の］高官』。その原題 *"Mantras et mandarins*, Le bouddhisme tantrique en Chine" は、頭韻を用いた非常に凝った題名であります。フランス語でなければ、その妙味を實感できないでしょう。著者の Michel Strickmann ミッシェル・ストリックマン氏は、これを書き上げて亡くなりました。彼はチベット語もサンスクリット語もともに非常によく出來る男でして、そういう能力を驅使してこれを書いたのです。ここに一册お持ち致しましたが、ご覽の通り大變に分厚い。註が全體の三分の一を占めている。密教に關する世界中のありとあらゆる文獻を讀破しているという感じが致します。これはパリの拙宅近くの本屋で見つけて卽座に購入しました。これはぜひとも邦譯すべきかと思われます。特に序說が素晴らしい。彼は、「密教を十分に理解するためには、日本の密教を勉强することが大事だ」と主張しております。微瑕はあるけれども、註はすこぶる詳細を極めます。特に道教と密教との關係について、本當に渾身の力を込めて追求しています。これが第一の見所です。三崎良周先生からの書評を期待しております。

なお中國學の分野からはいささか外れますが、久高［中山］泰子さんによる『萬葉集』の部分譯、『萬葉集』の中の「東歌」の佛譯も興味深いものでした。パリ滯在中、佛譯者の久高さんと協力者のメトワリ司さんとには何かとお世話になりました。この本はパリで開催された國際日本圖書展において、他の有力な出品書籍を壓して第一位の賞を得ました。

それから、これはフランス語の書籍ではないのですが、張廣達さんの敦煌學に關する著作『有關西回鶻的一篇敦煌漢文文獻—S 6551講經文的歷史學研究』を、パリへいらした著者の張教授から頂戴致しました。パリ市では第十三區に多くの中國人が住んでおり、中國大陸から今もたくさんの人がやって來る。だからパリでは容易に中國人に會えるのです。私も張教授他何人かの中國の學者と會いました。この張博士という人は、ちょっと私より年が上ですけれども、世界各地で特別講義をなさった方です。

ちなみに申しますと、パリ國立圖書館所藏の敦煌文書の目錄の V.5 二册も滯佛中に出版されました。ところがこの度の目錄は大變に出來が惡い。ドミエヴィル先生が編纂者の頃はもっと出來が良かったものですが。例えば『般若心經』の敦煌寫本ひとつ取ってみましても、ひどいミスがございます。例えば「呪文」の「呪」という文字。敦煌文書の般若心經ではみんな「口」が一つの呪なのですが、それを目錄では

「咒」に皆な間違えて印刷している。それで私は目錄の編纂者たちに宛てて批評文を寄せ、訂正を迫りました。しかし今もって何の返事もない。連中はこういう場合、「間違えた」とは絶對認めないものです。

十二　おわりに

時間が參りました。もっと他の事も申し上げたかったし、そのための資料も持參したのですが、多岐にわたりますから、また別の機會に讓らせていただきます。

最後にこの場で言おうと思っていたことは、日本人のフランスに對する錯覺であります。日本人は一見フランスの事をよく知っているように見えますが、それは大抵が大きな錯覺に過ぎず、事實は「翻譯」を通して知っているというに過ぎないのではないか、と最近思うようになりました。つまり「翻譯された世界」を知っているばかりで、直接にはほとんど何も知らない、翻譯にしか手が出ませんから。從って實際に現地へ行って體驗することに意味が出て來ます。そうしないことには、翻譯を通すだけでは、現實には殆ど何も正確には分からないでしょう。「翻譯」を通しての理解がいかに問題多く、危險か――ということに、日本人は餘り氣付いていないようです。この大きな問題については、別の機會に改めて話題にしなければなりません。

もう一つお話したかったのは、パリの高等學校の實際であります。最初のほうで申しましたように、私は娘と二人であちらで暮らしました（家内は留守番です）。それで娘は向こうの國立高校［天皇・皇后兩陛下がご訪歐の折り、特に參觀に立ち寄られたラ・フォンテーヌ高校］に編入したのですが、日本の高校とはずいぶん樣子が違う。例えば教員は一つの教室に居たっきりで、生徒のほうが教室間を移動するのです。父兄會へも參りまして、新たに知ったこともございました。一人で行った學生の頃と違い、今度は何事も娘と二人で當らなければならないことばかりでして、面白いこともあったし、反面難しいこともありました。それらについてもいろいろお話したいことがあるのですが、これまた別の機會に讓らせていただきます。

ずいぶんと時間を費やしてしまった割りには何だかとりとめもない内容になってしまいました。當然觸れるべき東洋學の他の分野や關連の方々に及ぶことが出來ませんでしたが、限られた時間でもありますから、この度はこの程度で私の責めをふさがせて戴きます。御靜聽ありがとうございました。